した。「彼にやらせてもらえてよかった。あの子は小さいときから大変な成育環境で、親に甘えられるような家庭ではなかったんです」と。彼は後でこっそり教官に「先生、僕、先生にお父さんをやってほしかったな」と言ったそうです。

読むことで自分を表現する

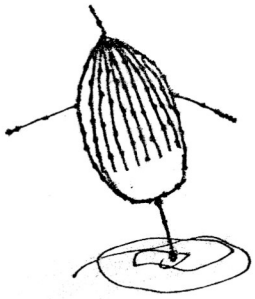
2回目の授業では『どんぐりたいかい』という絵本を題材にしました。6人のいろんなどんぐりが集まって、誰がいちばん偉いかを競う、というコメディで、最後はみんなで根性を競い合ってぐるぐる回って、回り過ぎてぱたんと倒れて「つづきはまたらいねん！」でおしまい。今度は集団劇です。コミュニケーションが苦手な彼らは、声をそろえるシーンでもなかなかタイミングが合いません。でも、上手に演じることが目的ではないのですから構いません。自由にくるくる回って、言葉を声に出せれば、それでいい。

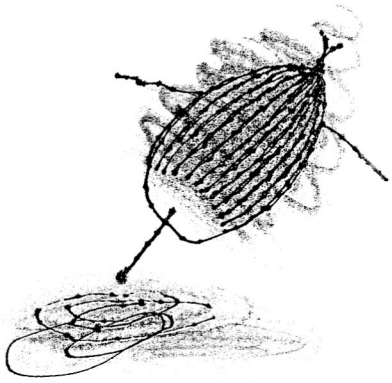
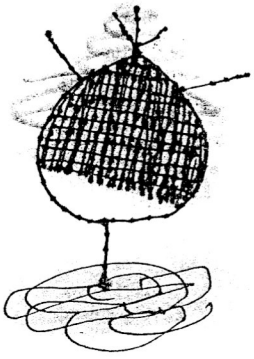
やっぱり「言葉は音」なんです。

文字を黙読するだけなら、そこで完結してしまいます。でも彼らは、同じ絵本でも読み手が変わると、全然違うものになることを実感し、言葉を音に返すことで自分を表現できる、と気付きました。また、これまで自分の考えを言うとぶん殴られたり、罵詈雑言を浴びせられたりしてきた子たちが、自己表現しても誰からも傷つけられないことに気付いたのです。

私は、なぜ細水さんが「夫も参加させてほしい」という私の願いを快諾してくれたのか、その理由を後で知りました。授業中、私と夫は、それぞれ自分の思いを語りました。違う見解でも夫は私に腹を立てたり、殴って言うことを聞かせたりしません。多くの少年たちにとって、それは初めて見る対等な男女関係だったのです。そういう多様性を彼らに見せられてよかった、細水さんはそうおっしゃいました。

さあこれで彼らの心に下地ができました。「次の授業までに、自分で詩を書いてきてくださいね」。彼らが書いてきた詩がどんなものだったかは、次回にしましょう。



りょう・みちこ

作家。1955（昭和30）年、東京都生まれ。毎日童話新人賞、泉鏡花文学賞を受賞。2007～16年、奈良少年刑務所において絵本と詩を使った「物語の教室」の講師を務める。著書に『あふれでたのはやさしさだった』（西日本出版社刊）他多数。受刑者の詩をまとめた『空が青いから白をえらんだのです　奈良少年刑務所詩集』はこの夏の「新潮文庫の100冊」に選ばれた。今回文中に登場した『おおかみのこがはしってきて』はロクリン社刊、『どんぐりたいかい』はチャイルド本社刊。